
クリームソーダ

S&N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリームソーダ

【Nコード】

N3625F

【作者名】

S&N

【あらすじ】

この恋のきっかけは、クリームソーダから始まった。愛香の恋の行方はどうなるのか！？

クリームソーダは、青春の味？

あなたと出会ったのは偶然か、必然か、運命か――。

* * *

印象に残る思い出というのは、ほんのささいなことから始まると思う。事実、私も普通に歩いていた時に、ある出来事から始まったのだから。

桜舞い散る四月、私は運命的な出会いをした。

相手の名前は、三条 さんじょう 彼方 かなた。

入学式の日、突然後ろから勢い良くこっちに向かってくる自転車と衝突して、ケガをして途方に暮れていた私を見てクリームソーダを買ってくれた、その人。なんでクリームソーダ？って疑問に思うかもしれないけど、まあそれは成り行きで（笑）

でも、それ以来私の心には、三条彼方という人が強烈に存在するようになったんだ。

今は5月。

そろそろ高校生活にも慣れて、部活も決まるであろうこの頃…

「よっ、愛香！」

と、話しかけてくるのは、《クリームソーダ》の君、三条彼方である。

偶然にも同じクラスになり、これまた偶然にも隣の席で仲良くなつて、今に至るわけで。

「よつ、彼方。どうしたの？」

彼方のテンションが高いのは日常茶飯事でわかりきってるけど、今日は特に高い。

「あのさあ、頼みがあるんだけど」

「彼方が頼みなんて珍しいね。」

「うん、実はさ、今男バスのマネージャー募集中してるんだけど愛香やらねえ？」

…マネージャーって。

そうそう、言い忘れてたけど、彼方はバスケット部所属。中学の時からずっとバスケット部に入っていたらしく、一年生ながら実力はなかなかのもので、顧問の先生や先輩からかなり注目されている。レギュラー入りの可能性も、という声もある。

だから当然のこと、女子からモテるわけで。

少しばかり私はもやもやした気持ちになる。

…ん？まてよ。

マネージャーになれば、仕事は忙しかもしれないけど、彼方と一緒にいる時間が増えるんじゃないか！

彼方がまた何かを話そうとする前に、私が遮った。

「やるっ！！私、マネージャーするよ！」

即答した私を見て、彼方はぱっと顔を輝かせた。どうやらあんまり期待してなかったみたい。

「マジかー！助かるよ！」

と言って私の両手をとった。仲が良ければごく普通の動作なのに、いきなりドキッとしてしまう。うっ、心臓の音聞こえちゃうよ！

「私で良かったら…」

「大丈夫だって！じゃあ行こうぜ！」

と言って、私を引っ張って行った。

手続きを終わらせ、体育館にみんなが集合する。

すると後ろに一人、女の子が立っているのを見つけた。

「それじゃあ始める前に新しいマネージャーを紹介する。」

その言葉に続き、私は頭を下げた。

「これからマネージャーとして頑張りたいと思います。よろしくお願ひします！」

幸いな事に、部員の人達は歓迎してくれたようだった。

あちこちでよろしく、とか、頑張れよ、とか、友好的な声が聞こえてくる。

「じゃあ…茉莉！こいつに色々教えてやれ。」

「ま…り？」

さつき見た女の子が前に出てきた。ここでやっと私はこの人もマネージャーなんだ、と気付いた。

「じゃー今度の試合に向けて練習を始める！」

部長の一声で、部員がそれぞれ練習を始める。

茉莉ちゃんと（どうやら同じ一年生みたい）二人この場に取り残された。わずかの間だけど、沈黙が流れた。

「あの…よろしくね」

私は茉莉ちゃんに声をかけた。

茉莉ちゃんは、こつちをちらつと見ただけですぐ顔をそらしてしまった。

「…足手まといにならないでよね」

こうして、忙しい高校生活の日々が始まったのだった。

これは、まだ青春のページの始まりに過ぎない。

もとはと言えば、クリームソーダから私の思い出が始まったんだ。

クリームソーダは、青春の味？

クリームソーダは、恋の味？

あなたを想うと胸がドキドキする…。
あなたが他の子と喋っていると胸がモヤモヤする…。あなたと一緒にいたい…。これって恋なのかな…？

＊ ＊ ＊

「…愛香。あんた、それ絶対恋してるよ。」
「へえっ！！」

日曜日、午後の昼下がり。久しぶりに部活が休みで、無二の親友、
栞と喫茶店でお喋り中。話の内容は、私の心から離れない―三条彼
方―のこと。

栞が言うには、私は彼方に恋をしてるみたい。でも、どうゆうこと
が恋なのかなあ…。

「愛香もついに恋かあ…。しかも、あの三条兄弟の弟くんだとわあ
…。私は、お兄さんの方が好みだけど。」

「えっ！栞って部長が好みなの！？」

彼方は、2人兄弟で2つ上のお兄さんがいる。そのお兄さんは、バ
スケ部の部長。名前は、三条 空。第一印象は、金髪でチャラチャ
ラしてそうだなあ…と思ったけど優しくてチームを誰よりも大切に
思っている人なんだとここ数日、見ていて思った。

「カッコいいじゃん。あの、つかみどころがなさそうなのところか
…。男女問わず、人気あるよ。」

「へえーそうなんだ…。」確かに、人気ありそうだなあ。

「…ああ、クリームソーダ飲みたい。」

目の前にあるアイスコーヒーを眺め、一気に飲みほす。

「この店にクリームソーダはないよー。愛香ってクリームソーダ好
きだっけ？炭酸ダメじゃなかった？」 「クリームソーダは、好き

になったんだ。」
クリームソーダは、彼を思い出すから。今、彼に会いたいっていう気持ちも恋なのかな？

* * *

栞と駅で別れ、1人家に向かって歩いていく。
暗くなってきたなあ。早く帰ろう…。

「あつ！！愛香じゃん！」えっ！！この声って…。血が、一気に顔まで上がって来るのが分かる。振り返ると、今一番会いたかった彼、《彼方》がいた。何で、急に！？心臓激しくなってきたし…。

「愛香、買い物帰り？」

彼方——！近づいて来る　なあ——！！今、絶対顔真っ赤だよ！

「あつ、うん。彼方はどうしたの？」

普通に喋れてるかな？

何で急に意識してるんだ…私。栞が帰りぎわに、『好きなら大胆にアタックだよ！』とか言うから…。

「俺も買い物してきた帰り。そうだった！愛香、一緒に帰ろう。遅いから送って行くよ。」

「えっ！！」

ええ——、凄く嬉しいけど…。

「遠慮はなし！俺も、家こつちだから。」

違う。彼方の家は、私と反対側だ…。遠回りになるのに。嘘は彼方の優しさだろうか…？

「あ、ありがとう。」

2人で歩き出してから、無言が続いている。何か話題…。

「か、彼方は誰と出掛けてたの？虹一くんとか？」

虹一とは、彼方の友達で同じバスケット部。一年生なのに凄く長身であ

る。

「いや、茉莉とだよ。」

「え…」

…茉莉ちゃんど？

『何で？』とは、聞けなかった。

「愛香、茉莉にしごかれてない？アイツ…一見冷たい感じだけど本当は良い奴だから。」

「うん…。」

茉莉ちゃんの話をした彼の顔は悲しそうで、そして凄く優しそうだった。

それから会話が続き、家に着いた。

「わざわざありがとう。」茉莉ちゃんの話をした時の彼の顔を思い出す。

あんな顔初めて見た。私がいつも知っている彼の顔は…。

「どういたしまして。また明日、学校でな。」

彼は、私に笑顔を向けて走り去って行く。彼の笑顔で、ある想いが心に過る。ようやく自分の気持ちにはつきり気がついた。

そうなんだ…私は彼方が、眩しいくらいに笑う彼が好きなんだ…。

クリームソーダは、恋の味？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3625f/>

クリームソーダ

2010年12月9日14時57分発行